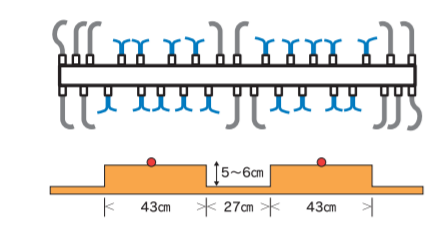


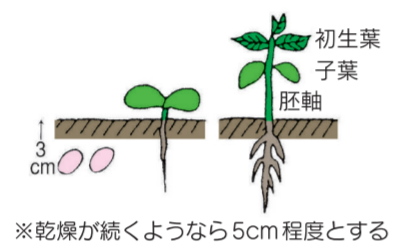
部分浅耕一工程播種を導入し、適期播種に努め、目標収量240kg/10aを目指しましょう！

時期	6			7			8			9			10			11					
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
主な作業	適地の選定			除草剤散布 (耕起・播種施肥) (耕起・整地)			中耕・培土			病害虫防除			カメムシ防除			収穫準備					
作業内容	<p>排水良好でかん水の恐れがない場合は、排水不良な場合は、排水溝を設け、排水を確保する。</p> <p>土壌診断を行う。適正 pH 6.0～6.5、土づくり参照</p> <p>※収量向上のため、麦ワラは全量すき込みます。</p> <p>※同一畑に、ちくしB5号以外黒豆等の品種をまき付けない。</p>			<p>ラウンドアップマックスロード、またはバスタ液剤を使用する。</p> <p>種子消毒参照</p> <p>ハト害、紫斑病参照</p>			<p>1回目 本葉2枚から4枚までに行う。</p> <p>2回目 本葉5枚から6枚までに行う。</p> <p>8月10日頃までに必ず一回は実施する(倒伏防止と雑草対策)。</p>			<p>※ハスモンヨトウの発生は隣接畑に被害を与える。</p> <p>ハスモンヨトウのふ化幼虫が群集している白変葉を見つけたら除去する。(葉の裏まで確認する)</p> <p>ハスモンヨトウ参照</p>			<p>紫斑病参照</p> <p>カメムシ類参照</p> <p>ハスモンヨトウ参照</p> <p>病害虫防除基準参照</p>			<p>青立ち株や雑草は刈取前に抜取る</p> <p>成熟期は大部分が落葉し莢を振ると、音をたてる程度に乾燥した時期</p> <p>刈取適期は成熟期7日後から(子実水分16%以下)</p>			<p>茎や莢が入らないようコンバインの風量を調節する。</p> <p>※刈取の際は土のかき込み、雑草の汁による汚損粒に注意しましょう。</p> <p>刈取適期は成熟期7日後から(子実水分16%以下)</p>		

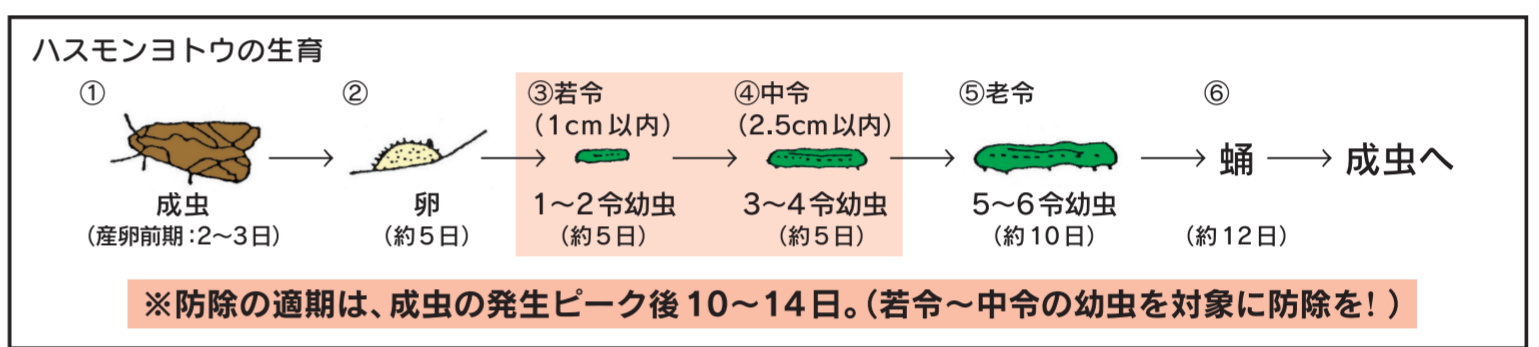
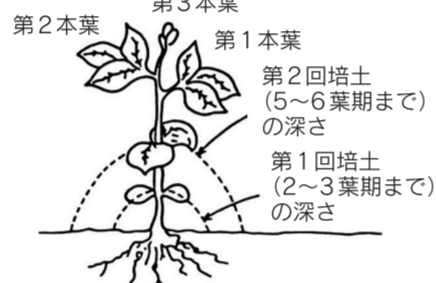
部分浅耕一工程播種



播種・出芽期



中耕・培土



◆品種特性表 (7月10日播種)

品種名	開花期	成熟期	耐倒伏性	10a当り子実重	百粒重
ちくしB5号	8月20日	11月2日	やや強	366kg	32.4g

※引用元: 福岡県農林業総合試験場データ

◆種子消毒基準

薬剤名	処理方法	処理量	備考
キヒゲンR-2フロアブル	塗沫	種子10kgに200ml	ハト害、紫斑病
クルーザーMAXX	塗沫	種子10kgに80ml	ハト害、紫斑病、ネキリムシ、莖疫病

◆施肥基準

大豆作付条件	肥料名	基肥	成分量 (kg/10a)			遅播はちくごのめぐみ444を施用する
			窒素	リン酸	カリ	
一般	PK化成40号	30	—	6.0	6.0	遅播はちくごのめぐみ444を施用する
遅播	ちくごのめぐみ444	20	2.8	2.8	2.8	

※大豆種子は肥料焼けしやすいので、播種と施肥位置が重ならないように注意する。

◆播種時期と栽植密度

品種名	ちくしB5号 (1株当り2粒)	
播種期	7月5～20日 (適期播き)	7月下旬 (遅播き)
条間 (cm)	65cm	
株間 (cm)	30～20	15～10
10a当り播種量 (kg)	3.0～4.0	6.0～8.0

※播種深度は3cm程度が適当であるが、土壌が乾燥している場合はやや深め(5cm程度)にする。播種量は適期内で早めの時期は少なめに、遅めの時期は多めとする。

◆土づくり

資材	施用量	備考
生石灰	100	酸性障害対策、水と反応して発熱する。播種前の2週間前までに施用する。
炭酸苦土石灰	200	酸性障害対策、カルシウム、マグネシウムを含む。
オイスターミネラル	100～200	酸性障害対策、カルシウム、微量元素を含む。
ミネラルG	160	酸性障害対策、カルシウム、マグネシウムを含む。

適正な生育のための pH 値 pH6.0～6.5

※土壌の酸度 (pH) 矯正は、大豆の養分吸収や根粒の活性を高めるために行う。

安全と信頼は生産者のチェックから!! STOP異物混入

被害粒	紫斑病・褐斑粒	皮切れ・剥皮粒	汚損粒 (泥汚れ等)
発生原因	・前年産の罹病莢葉 ・罹病種子の使用 ・適期防除の不徹底	・収穫時期の遅れ (過乾燥)	・降雨直後および朝露後に収穫 ・雑草、青立ち株の混入 ・コンバインの刈り取り位置が低い (土のかき込み)
防止策	・種子更新 100% ・種子消毒の徹底 ・適期防除	・適正な子実水分での収穫作業 子実水分: 16%以下 収穫開始: 蒸水分50%以下 収穫時間: 蒸水分の高い朝夕を避ける 午前11時～午後5時まで	・降雨直後や朝露発生時の収穫を避ける ・収穫まえの雑草、青立ち株の抜き取り ・コンバイン収穫時の刈り取り位置に注意

◆除草剤基準

※中耕・培土による耕種防除も併せて行う。

使用時期	除草剤名	10a当り使用量	希釈水量	留意点
播種前	ラウンドアップマックスロード	200～500ml	50～100ℓ	隣接、周辺の水稲など他作物への飛散を防止する。ラウンドアップマックスロードは効果を高めるため、出来るだけ100倍希釈する。(少量散布の場合は水量を25～50ℓにする)
	バスタ液剤	300～500ml	100～150ℓ	
播種直後 出芽前	ラクサー粒剤	4～8kg	—	覆土は2～3cm以上とし、よく整地して鎮圧する。二重散布にならないように均一に散布する。
	ラクサー乳剤	400～800ml	100ℓ	広葉雑草・イネ科対策 ホオズキ対策: フルミオWDGを5～10g/10a(希釈水量100ℓ)を混用して散布する。散布後は専用洗浄剤で十分に洗浄すること。
	プロールプラス乳剤	400～600ml	100ℓ	
生育中	パワーガイザー液剤	200～300ml	100ℓ	出芽直前～3葉期まで(雑草発生始期～2葉期)
	ポルトフロアブル	200～300ml	100ℓ	イネ科雑草対策(3～10葉期) 但し収穫30日前まで スズメノカタビラを除く
	大豆バサグラン液剤	100～150ml	100ℓ	アサガオ類対策。大豆2葉期～開花前 但し収穫45日前まで
	アタックショット乳剤	30～50ml	100ℓ	アサガオ類対策。本葉2葉期～開花前、但し収穫45日前まで。大豆に褐変、白化などの薬害が生じることがある。
バスタ液剤	300～500ml	100ℓ	アサガオ、ツルクサ等対策(大豆にかからないように畝間散布する) 但し収穫28日前まで	

◆病害虫防除基準

時期	対象病害虫	薬剤名	10a当り使用量	使用回数	使用方法	
播種時～本葉2葉期	ネキリムシ	ネキリエースK	3kg	2回以内	土壌表面株元処理	
発生時	マメハンミョウ	スミチオン乳剤	1,000倍	100～300ℓ	4回以内 散布	
液剤体系	8月上～中旬	ハスモンヨトウ	ノーモルト乳剤	2,000倍	100～300ℓ	2回以内 収穫14日前まで
	9月上～中旬	ハスモンヨトウ	プレオフロアブルまたは	1,000～2,000倍	100～300ℓ	2回以内 収穫7日前まで
		ハスモンヨトウ	プレバソフロアブル5	4,000倍	100～300ℓ	2回以内 収穫7日前まで
		カメムシ類	スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	100～300ℓ	2回以内 収穫7日前まで
	9月下旬	紫斑病	トップジンM水和剤	700～1,500倍	100～300ℓ	4回以内 収穫14日前まで
		カメムシ類	キラップフロアブル	2,000倍	100～300ℓ	2回以内 収穫7日前まで
多発生時	ハスモンヨトウ	グレーシア乳剤	2,000～3,000倍	100～300ℓ	2回以内 収穫14日前まで	
へり防除体系	8月上～中旬	ハスモンヨトウ	ノーモルト乳剤	8～16倍	0.8ℓ	2回以内 収穫14日前まで
	9月上～中旬	ハスモンヨトウ	プレオフロアブルまたは	8～16倍	0.8ℓ	2回以内 収穫7日前まで
		ハスモンヨトウ	プレバソフロアブル5	16～32倍	0.8ℓ	2回以内 収穫7日前まで
		カメムシ類	スタークル液剤10	8倍	0.8ℓ	2回以内 収穫7日前まで
		紫斑病	トップジンMゾル	5倍	0.8ℓ	4回以内 収穫14日前まで
	9月下旬	カメムシ類	キラップフロアブル	16倍	0.8ℓ	2回以内 収穫7日前まで

※へり防除体系において9月上～中旬の薬剤混用時には、順番に気を付け、使用直前に混合する。例: プレオフロアブルまたはプレバソフロアブル希釈後、トップジンMゾルを混合する。

※農業の登録内容は随時更新されますので使用する際は、包装容器か袋に記載されている有効期限および登録内容を確認して下さい。
※農業の安全使用と隣接する作物への飛散防止対策を徹底しましょう!
※作業日誌、生産工程管理チェックシートは別に配布しますので、必ず記載、提出をお願いいたします。